

酒処伏見と奈良電鉄

吉田英生 (S53/1978卒)

1. 我、伏見を愛す —— I ♥ 243

図1 伏見の酒蔵（伏見酒造組合のHPより <http://www.fushimi.or.jp/>）

京都で住むなら何処か？ 筆者の場合、酒処伏見をおいて考えられませんでした。図1のように酒蔵がたくさんあるので町中にお酒のいい匂いが充満しているかも？とも期待しました。ま、匂いの方は酒蔵のすぐ近所を除けばなかったですが、京都でも河原町以外では三条会商店街と並んで大きな(長い)大手筋商店街には、伏見の地酒を試し呑みできるバーカウンターの店もありますし、スーパーの前には銘酒のもとになる伏流水がわき出ているところもありました。また、大手筋の商店街を抜けて西方に5分も歩くと、図2のような菜の花が美しい酒蔵も見られます。お酒自体については、16年近



図2 松本酒造(2020年4月16日撮影)

く前になりますが、当時、月桂冠の総合研究所 所長だった秦 洋二氏に“清酒造りと「熱」”というとても興味深い解説を日本伝熱学会誌に寄稿いただいたので、一読をお勧めします http://www.wattandedison.com/Heat_in_sake_brewing.pdf。

伏見の魅力はお酒だけではありません。歴史を振り返ってみましょう（月桂冠のホームページ <https://www.gekkeikan.co.jp/enjoy/> は充実していて楽しいです）。まず400年余り前、豊臣秀吉が最晩年(1593–8)を過ごした伏見は、京都一大坂¹を淀川の舟運で結ぶ交通の要衝でした。江戸時代には伏見奉行がおかれまして（近鉄桃山御陵駅の南東に西奉行町と東奉行町という地名が残っています）。また幕末、薩摩藩邸の定宿であった寺田屋²は、1866年3月9日に坂本龍馬³が伏見奉行により暗殺されかけて九死に一生を得た舞台でもあります。さらに、日露戦争末期1905年に編成された陸軍の工兵第十六大隊は、1908年に伏見奉行跡地に衛戍(えいじゅ)地を定め⁴、1936年には工兵第十六聯隊となりました。このように、伏見は秀吉以降、幕末を経て太平洋戦争まで、国内外の戦乱とも密接な関係を有してきましたので、歴史的スポットがたくさんあります。さらに、江戸時代に伏見から酒や米などの搬出および旅客を大坂と行き来させるための十石舟(漢字注意:じっこくぶね)や三十石船(漢字注意:さんじっこくぶね)は、現在もなお濠川(宇治川派流)で運行されていて酒蔵の美しい景色の中を遊覧することができます。

2. 「伏見」×「奈良電鉄」——「静岡県」×「JR東海リニア」とのアナロジー

伏見酒造組合のホームページ <http://www.fushimi.or.jp/guide/water.html> には、以下のように説明されています。「伏見は、かつて“伏水”とも書かれていたほどに、質の高い伏流水が豊富な地。桃山丘陵をくぐった清冽な水が、水脈となって地下に深く息づき、山麓近くで湧き水となってあらわれます。日本を代表する酒どころとなったのも、この天然の良水に恵まれていたことが大きな要因です。」

¹ 「大坂」を「大阪」と一元的に表記するようになったのは明治以降です。

² 寺田屋には当時の刀の傷などが残っていると以前から伝えられてきましたが、現在の寺田屋は20世紀初頭に改築されたものであることが最近明らかとなったので、注意願います。

³ 坂本龍馬は誕生日も忌日も和暦では11月15日であることに気付きました。ただし、誕生年は天保6年(当時は寛政暦のため1836年1月3日)、没年は慶応3年(当時は天保暦のため1867年12月10日)という、和暦特有の複雑なことになるそうです。

⁴ 司令部は深草(現 聖母女学院本館)でした。このため、塩小路の川端通と伏見の京町通の間を結ぶ道は師団街道と呼ばれています。なお戦後、伏見奉行跡の兵営は1959年には京都初の大規模住宅団地である桃陵団地に生まれ変わり、その南側には公務員(京大職員を含む)向けの伏見合同宿舎も2006年までありました。この辺りは愛着があり、つい詳細に記してしまいました。

その伏見酒造組合が昭和2(1927)年12月に奈良電気鉄道(以下「奈良電鉄」と略、近鉄の前身の一部)に対して抗議した出来事は、現在の「静岡県」×「JR東海リニア」とアナロジーとも言えるでしょう。伏見の立地の特殊性に加え、時の特殊性——大正天皇崩御のため昭和3年11月に昭和天皇が御大典(即位の礼)で京都から橿原神宮に移動することも加わって、極めて興味深い展開になります。以下、奈良電鉄の社史(1963)から元号で表示してまとめてみます。

図3に示すように、奈良電鉄は、大阪電気軌道(略称は大軌、近鉄の前身の一部)の奈良線西大寺と京都を結ぶべく、まず西大寺・小倉(伊勢田)間について、昭和2年9月に着工したのち順調に昭和3年9月に完成させます。一方、当初、

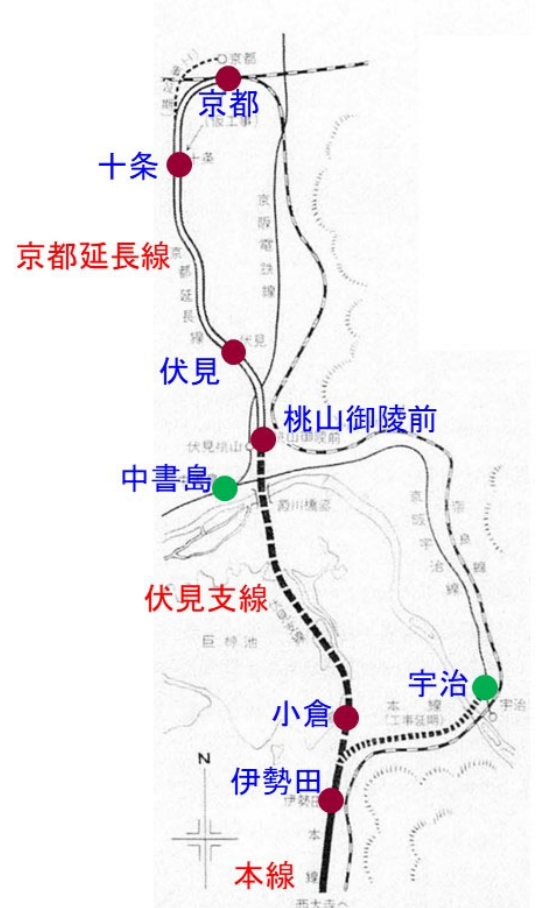


図3 奈良電鉄のルート(奈良電鉄社史より)

小倉以北は東方の京阪宇治に向かって京阪電鉄に乗り入れ、中書島経由で京都に向かう路線を計画しましたが、遠回りのため国鉄奈良線と比べてメリットがないということで、小倉から北上して伏見に至る伏見支線に変更します(ただし変更当初は、京阪伏見桃山以北は京阪線に乗り入れ予定)。このような計画中に、大正天皇崩御という天下の一大事が発生し、それに付随して昭和天皇の御大典までの完成を視野に入れた突貫工事を強いられることとなります。

まず、淀川を渡る鉄橋付近は、前述した工兵第十六大隊の架橋演習場のため、橋脚が夜間演習の障害となり危険であるとして、単純(橋脚なし)トラス橋しか

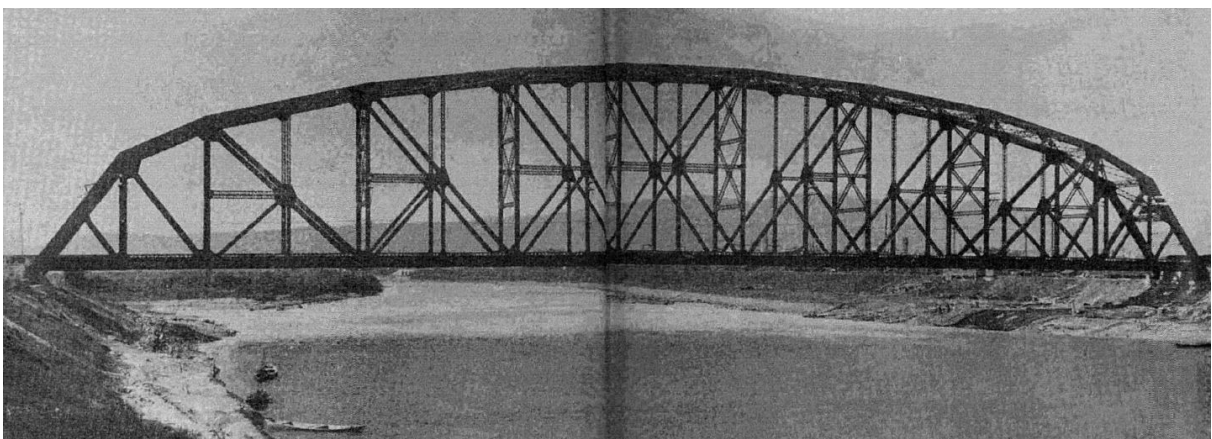


図4 淀川橋梁(径間164.6m、中央高さ24.4m、全重量1839トン)(奈良電鉄社史より)

許されませんでした。また、伏見の商業地帯を用地買収するのは困難である上、桃山御陵参道との平面交差が京都府から許されなかった（注：少し西側の京阪京都線は明治43年開通なので、当時は桃山御陵もなく問題ありませんでした）ため地下線とすることを計画しました。ところが伏見酒造組合は、醸造用地下水の水脈が切断され、水量の枯渇減少、水質の変化などをきたすことがあれば、醸造伏見の死活問題であるとして、鉄道省へ地下線反対の陳情をするとともに奈良電鉄に対しても強力に阻止運動をしました。このときに、京都帝国大学理学部の松原厚教授は、伏見酒造組合から依頼されて行った研究成果を「伏見町の地下水に就いて」という論文（醸造學雑誌、昭和4年、以下に序文）で報告しています。これらの結果、伏見付近は京都地方で最初の高架線とすることを余儀なくされました。

伏見町の地下水に就いて

京都帝国大学理学部教授 理学博士 松原 厚

伏見町には未だ水道の設備がないので、家庭用竝ならびに工場用の水は總すべて之を井戸もとに求めなければならぬ、従つて井戸水の良否と其湧出量の如何とは、直接に町民の喉頸を抑へて居る重要問題である。然るに、先年奈良線の鐵道敷設に當り、東方の山際が一部掘鑿くつきくせられた爲め、同町の東南部特に桃山御陵道附近の井戸水は頓とみに減却した。又東方の斜面地に於ける新築家屋の増加も近年特に著しくなつた、是等の原因により次第に在来の井戸は涸渇に瀕し冬期酒造用水が盛に汲み上げらるゝ期節になれば、一般民家の井戸は干上つて了ふものも相當多數に上る始末で、前途誠に樂觀を許さない事態に立到つて居る。

此時に當り、又々町民に不安を感じしむる一問題が起つた。それは、昭和三年の春、奈良電氣鐵道が同町の東方を通過することになり、大手町御陵道を直角に横斷する地下墜道トネルが設計されたことである。此結果、井戸水に對して最も大なる危懼を感じたのは主として町の東南部一帯の民家であるが、此方面には酒造用水を供給する井戸が多い爲めに殆んど全町の酒造業者が齊ひとしく不安を感じることになつた。

著者は今春來伏見稅務署竝に伏見酒造組合其他の援助を得て、同町に於ける一般地下水の性質、配給状態竝に酒造用水の成分等に関して或種の調査を遂げ、且前記の豫定地下墜道が井戸水の配給に及ぼす影響に就いて或種の測定を行ふ機會を得たので本紙に其梗概を報告することゝした。蓋し各地に於て之に似寄つた問題は屢々しばしば起り勝ちのことであるから、其調査に當らるゝ人々の参考に資すると共に、方法の當否或は便不便等について讀者の批評を仰ぎ度いが爲めである。

(論文全文は http://www.wattandedison.com/matsubara_fushimi_1929.pdf 。国会図書館オープンアクセス <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10390593?tocOpened=1> から抜粋。)

前述したように、伏見支線から北側は当初、京阪線に乗り入れる案でした。しかし、線路容量の不足が明らかとなったため、奈良電鉄が自社で京都延長線を建設することになりました。これは、[図5](#)のように大正10年に東山トンネルが開通して東海道本線が現在のルートになり、京都・稲荷間が国鉄奈良線として新たに転用された結果、廃線となった旧奈良線の京都・伏見間と伏見貨物線を国鉄から払い下げてもらい敷設しなおす（狭軌→広軌）ことにより、効率的に行われました。

[表1](#)に西大寺・京都間の突貫工事の記録をまとめました。西大寺・小倉間の本線以外は、すべて昭和3年着工で御大典直前に完成という、ものすごい早さです。あらためて当時の日本人のパワーと集中力に圧倒されますね！

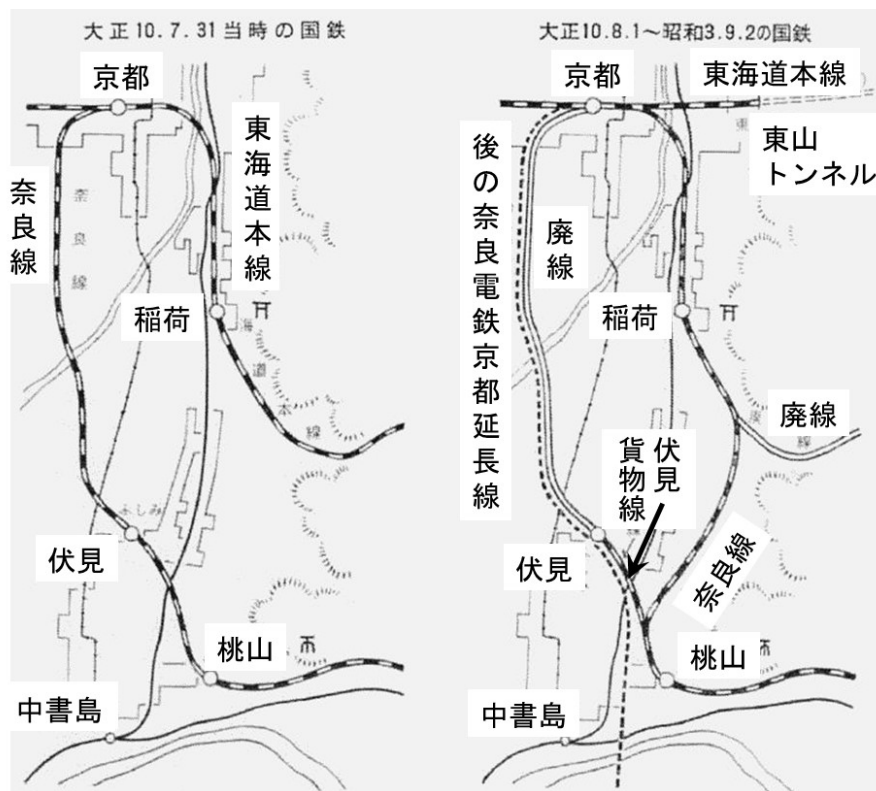


図5 国鉄線のルート変更（奈良電鉄社史より）

表1 突貫工事の記録（奈良電鉄社史より）

線別	区間	着工(S3年)	竣工(S3年)
京都延長線	京都—伏見	7月20日	10月
	伏見—桃山御陵前	9月3日	11月12日
伏見支線	桃山御陵前—淀川右岸	6月2日	10月
	淀川橋梁	4月1日	10月16日
	淀川橋梁—小倉	4月	10月
本線	小倉—西大寺	(S2年)9月	10月
本社事務所(伏見町御幸宮門前)		7月	10月

3. 「邦坊 奈良電道中記」 大阪毎日新聞、昭和3(1928)年11月2日全面広告 御大典の直前、京都・橿原間全線開通記念のとても面白い話をつまみつけたので、次ページ以降に清書して読みやすくして掲載します。

(巻頭面) 1 聞新日毎阪大 日二月一十年三和昭 (第2449号) (7)

邦坊 奈良電道中記

「邦坊」君は、奈良電道中記の主人公である。彼は、奈良電道の開通を記念して、奈良の各地をめぐり、その風景や文化を記述する。...

奈良の風景は、古くから美しい。その中でも、奈良公園の春日大社は、多くの参拝客で賑わっている。...

奈良の文化は、古くから栄えた。その中でも、奈良の古くから栄えた。...

「邦坊」君は、奈良電道の開通を記念して、奈良の各地をめぐり、その風景や文化を記述する。...

奈良の風景は、古くから美しい。その中でも、奈良公園の春日大社は、多くの参拝客で賑わっている。...

奈良の文化は、古くから栄えた。その中でも、奈良の古くから栄えた。...

十一月三日 明治節
奈良御陵前 開通
十一月十五日
京都 開通
橿原 開通
奈良電道 開通

奈良電道 沿線案内図

JAPAN TODAY & TOMORROW

邦坊 奈良電道中記

注一、「12」（戸籍統一文字番号

900110）は「え」で代用した。

注二、明らかな誤植と思われる字

は訂正した。

注三、必要に応じルビや注を「」

で挿入した。

奈「僕ですか、僕が今度開通した

奈良電車ですよ、まだ、奈良電車

をご存じありませんか、へえ君は

一體誰です。」

邦「僕は邦坊です。」

奈「あ、あの呑氣者の氣紛れ者の

鼻の大きな邦坊君ですか、やあ失

敬ツ」

邦「失敬ツ」

奈「ところで邦坊君、君は汽車は

嫌ひださうだが電車はどうです」

邦「電車なら乗つても大丈夫だと

思ひますよ」

奈「ぢや、こうしよう、僕はねえ

今度開通したんだよ、僕はねえ、

乗心地もよく、速力だつて氣持ち

よく出るよ、奈良、京都間を汽車

なら現在一時間半もかゝるとこ

ろを僕なら約五十分だ、どうだ、

素破らしいだらう。沿線二百余万

の住民及び省線による京都奈良

間一ケ年の交通客百五十万人に

とつて僕は最短交通路として大

いに囁目されてゐるんだ。オイ、

行かう」

邦「一寸待つて呉れ、一體それで

君の目的線路はどうなつてゐる

んだい」

こゝで彼が最新調の車體に充

分氣取つたモダンスタイルを整

へて

奈「エヘン、つまりだね、」とやり

出すのである。

邦「抑抑（そもそも）奈良電車の

使命たるや平安の都と寧樂の都、

つまり奈良と京都を結ぶ高速度

的短距離の連絡だ、一時間半も要

した在來の不便極る汽車をから

ずして僅かに五十分で走破する

といふ頗る近代のさ 加之我が

國を創設し給ひし神武帝陵檀原

神宮と桃山の明治大帝陵を結ぶ

べく生れた新電車であるんだこ

れ吾人が負ふたる使命であり同

時に又余輩の光榮である、由來ツ」

とこの時の彼の聲は一層大き

くなるのである、見れば頭の電流

の触角から火花を散らしてゐる、

おやぢが熟すると葉罐頭から湯

氣を立てるやうに、超近代人であ

るところの電車が傾倒するとさ

すがに電氣の紫閃を發するらし

い。危くて側へ近寄れない。

奈「由來、京都奈良間の交通は省

線一本を以て行はれてゐて、その

設備、特に所要時間の點において

極めて不便であるから、京都奈良

を交通する客には、場合によつて

寧ろ大迂回して一旦大阪に出で、

友人、大軌（大阪電氣軌道）電車

で奈良へ行くものが多い、この時

代錯誤的、非文明の交通路を救ふ

べくけつ然として立つたのが我

輩だ。同線は始發驛たる省線京都

驛より直に南進して伏見桃山御

陵前を経て奈良に至り、更に天理、

檀原神宮に至つて吉野に連絡す

るから我が國隨一の遊覽地たる

近畿名勝地の中程を横断する譯

である。どうだ、何と素破らしい

だらう」

邦「素破らしい、資本金は幾らだ」

奈「一千百五十万だ、この我輩の

風體から見てくれ、オ、戀人の後

毛の如く情熱的でやさしい緑の

シーツの感触、明るきスポーツ姿

の軽快さよ、！」

彼は仲々芝居氣たつぷりで面

白い奴らしい。それに新人である

丈け本當に健やかな脚をもつて

ゐる この男となら身體を託し

て引つ張り廻されてもいゝやう

な氣がした。で

邦「ぢや、連れて行つてくれ」

彼が僕の服装を見て不平をい

ひ出した、

奈「どうも菅笠姿ぢや並んで歩く

のが羞しいね、もつと何とか近代

的にならないかねえ」

邦「僕はとに角これより仕方がな

いよ、却つて新舊の時代闘争で頑

張るのが面白いぢやないか、それ

に却つて僕の舊式な恰好が君の

モダンな男ぶりを一段と光らせ

るといふものだ まあ、これで行

かう。」

彼、不承々々うなづいた。で、

何かいふらしい。

奈「邦坊君、こゝがこの線の出發

の起點だよ、京都だ。京都のお客

様はみんなこの省線京都驛から

乗つてもらうんだね。表玄關（北

口）からでも裏玄關（南口）から

でもどし／＼といらつしやいと

いふわけだ。ところで、京都は只

今、博覽會があるし、もう御大典

で大變な人氣だよ 君、博覽會を

見たかい。」

邦「まだ、見ないよ、」

奈「では一遍見ようぢやないか」

邦「オイ、止せよ、時間が無いだ

らう」

奈「何、我輩ののろい孫に乗つて

行けば直ぐだよ」

彼は京都の市電をのろい孫だ

つていひやがる。

奈「ぢや表から見るだけだ、いゝだ

らう」

チンチン——東山二條博覽會前

停留所

奈「どうだ素破らしいねえ」

邦「素破らしく派手な塗りだ、そ

れに大變な建築だねえ、三角や四

角に丸の交錯せる近代チヤズか、

厳しい守衛のあの服装が振つて

ゐるねえ、やつぱりあゝいふとこ

ろにも御大典氣分が表現されて

ゐる譯なんだよ、そうら美人が入

成されてゐる、東洋に二つとない、
ノーピーヤ [pier 橋脚] 橋つたア
此奴のことだ」

邦「なる程」

奈「感心したか」

邦「感心した」

奈「それぢや、そろ／＼出掛けや
うか」

このあたりから宇治もまぢかだ
奈良電の曰く「宇治支線は來年四
月には完成の豫定だよ」と

宇治は茶どころ茶は宇治どこ
ろ茜襪に菅笠のねえさん達が縁
まんぢゆうの葉かくれに

寝たや、ねぶたや寝た夜はよか
ろ摘んで寝た夜は尚よかる
なんて唄ふ聲が情緒的だ。

宇治にラチユム温泉があるそう
だつひで一杯浴びる。電車は湯
に入れないのでちつと立つて、

奈「オイ、湯加減はどうだ／＼」
と見てゐるだけだ、これから途中
瓦椋の池、池の周囲が三里余で、

東西三十二町南北二十七町の大
池だが新道のため二面に分岐し
て西部は水煙渺「えんびよう」と

して芹荻の情によく東部は水浅
で、紅蓮、白蓮、鬼蓮美しさは白

鳥船をうかべるに相應しい。
次は新田邊の停留所

武陵桃源を思わせる平和な村、木
津の清流に臨んで風趣また一段
とある。

奈「郊外ピクニックには好適地だ
よ」

といふ。そこに薪の一休寺がある
あの滑脱の一休禪師のみたここ
ろだそうな、和尚の居室は虎丘庵

といつて庭園が素晴らしい、世に
三作の庭と稱し彼の丈山、松花庵、
佐田川喜六の三士共同意匠にな
るところのものらしい。

方丈には高弟墨濟禪師に命じて
作らせ自分の頭髮を植えたとい
ふ和尚の影がある

邦「オイ、奈良電 和尚を一遍電
車に乗せたら、どうだ」

奈「不可ねえ／＼、あの悪口屋の
和尚のことだから必づとまた、文
化機關を罵倒するに違ひない」

邦「お蔭で僕は褒められるな、昔
笠に薪の杖とは、う「愛」い奴う
「愛」い奴つてな、それから何か手
みやげを呉れるぜ」

奈「手みやげなら、こゝには、今
だに和尚遺法の納豆がある、當寺

の名物だからそいつを呉れるだ
らう」

邦「納豆はナツト心細い」

奈「オイ、見ろ、生駒の山が見え
るだらう、こゝから生駒へ出るの
も近いよ」

神功皇后陵、成務天皇陵、垂仁天
皇皇后陵、稱徳天皇陵、平城天皇
陵、仁徳天皇皇后陵、などの御陵

及び秋しのの雪ほの白し鷹の鈴
(支考)の歌で有名な秋篠寺があ
る、平城を過ぎ西大寺、京都から

此處までが二十一哩五分、こゝか
ら大軌電車に乗り入れ油阪を経
て奈良に向かつてゐるのである。

邦「オイ、早く奈良へ行かうよ」
奈「そう、喧しくいふなよ、俺れ
には軌道といふものがある。軌道

にはカーブもあらアね人間並み
に行くけえ、今、カーブを曲つて
ゐるとこさ、——ポー、ピー、ポ

ー——さあ、行かう」
奈良には百人首の鬨秀「けいしゅ
う」歌人が出迎へて、早速奈良電

へ羞かしさうに檜扇を傾けて握
手を求めてゐる。皆片手に短冊を
持つてゐる。開通祝ひのことぶき

の和歌を書いてあるらしい、こつち
にあのサラリとした文字が讀め
ないから文句も分らない。僕を見
て

「この人は何人ぞかし」
と聞いた、奈良電が漫ぐわの邦坊
だと説明したら、檜扇のかげで

「ホホ……………」
と笑つた。その玉を轉がすやうな
鈴を振やうな嬌音の可愛らしさ

つたら——ウーイ、堪らなか
つたぜ。

邦「オイ、とに角、おやぢに會ひ
たい」

奈「おやぢつて一體誰だ」
邦「大佛ぢやないか、奈良の大佛
さんといふぢやないか、あいつに

會ほうよ」
奈「口の悪い奴だね、まあ、軌道
を外して行かう」

東大寺の大佛殿、いかさま、お
やぢ居よる。
邦「馬鹿に大けえな」

奈「身の丈け五丈三尺、面の長さ
一丈六尺、掌へ六人は大丈夫座れ
ます、え、こちらへどうぞ」

邦「おぬ戯談ぢやないぜ、しかし
に篋棒に大けえ、オット、僕はお

やぢに傳言があるんだ、待つてく
れ」

山肌の襷のような大佛の腹の
上を攀ち上り、みづおちの谷間を
辿りながらやつと坦々たる平地

に達した、こゝが肩らしい、富士
山の斜面見たいだ。そこでヤット
コサと、憩ひの汗を入れて、さて、
一服煙草を喫んで、心安く、

邦「大佛さん」
と呼ぶ あまり顔が大きなの
で眼や鼻やらさつぱり見當がつ
かん すると

「何んだい」
と太い確かりした聲が聞える、
どうやら大佛さんの聲らしい、

邦「あなた、何時も一遍京都見物
がしたい、といつてゐたさうです
ねえ」

「いかにも、一遍京極や円山へ
行つてみたい」

邦「しかしな、大佛さん」
「何だ」

邦「そりあ、やつぱりあきまへん
わそれをこの間京都の人から傳
言を聞いて來たんですよ、大佛さ

んが、あんなに京都見物したがつ
てゐるけれど、あの圖體ぢやとて

も駄目だから、また交通機關完備の暁あんだの身體を入れる汽車でも出来た時来るように言つてくれ、君あんぢよう言ふて来てや、こない聞いて来たんだが大佛さんやつぱりその頃まで、京都行きはあきらめたがいゝぜ」

すると大佛さんが不服そうに

「今度、奈良電車とかいふ、軽

快な、便利なやつが出来たぢやないか、あいつで連れて行つてくれ」

僕、上から 下で待つてゐる奈良電を呼んだ。

邦「オーイ、おやぢがな、君に乗つて行くツてよう」

奈「無茶いふな、なんぼ最新式でもこんな大きな身體乗せたら潰れて了ふがな、断つてくれよ」

そういつて彼は大佛殿から逃げ出した。僕も飛び降りて

邦「おやぢ失敬ッ」

と、奈良電の後を追つて逃げた若草山の温容を後に、鹿の聲を後に、二月堂を後に、あられ酒を後に。

奈良電は再び西大寺より

奈「こゝから天理教へ行こうぜ」と俺をひつばる

途中平端な桃林の紅、西に法隆寺の塔が見える。奈良電の説明によると京都から奈良へばかりでなく京都から天理にも又橿原神宮へも直通電車であつて飛ばすのだそうだ

邦「天理教は丹波市町つたねえ、こりや仲々便利だ、」

「よう、拂（はら）へ玉へ天理王のみこと——」『あしきを払うてたすけ給へ天理王命』が正しい」

奈「明治四十四年起工して大正三年までかゝつたこれが天理教の本部だよ、地域八千坪輪奐（りんかん）の美は東西本願寺につぐそうだ、中山の婆さんは偉いもんだねえ。」

邦「拂へ玉へ天理王のみこと——」

奈「サア、これから終點橿原神宮へ直行するよ、ピー、ポー、ピー

あれが毘沙門天の信貴山だ、あれが顕宋帝陵、武烈帝陵、孝靈帝陵ピー、ポー、ピー」

彼、大和平野をひた走りに走るこつちは堪らねえ、

邦「オーイ、少し速力を緩めてくれ、そりや聞えませぬ奈良電さん君の脚はとても早いねえ。そりや

最新式だからといふかも知れないが實際だよ、少しこつちの身にもなつてくれ、旅は道連れ、世は情けつてからな」

奈「やれやれ」

邦「で、こゝは何處だらう」

奈「神武天皇の御陵さ橿原神宮はもうすぐだぜ」

ピー、ポー、

奈「そりや、うねび山見れば畏し橿原のひじりの宮の大宮どころ」

と本居宣長の詠んだ畝傍山が見えるだらう」

邦「見える」

橿原神宮前、こゝでは彼は完全に脚をとどめた。僕は宮幣殿社の森厳な靈域に立つて獨りでに頭を下げた。東征六年皇威治（あまね）く六号に及んで畝傍山の東南橿原の地に都を奠（さだ）められ、

底つ磐根に宮柱太しり、高天原に氷木高しりて天壤無窮の皇基を開かれた二千五百八十八年の昔を偲（おも）はせる。社殿は何れも京都御所の一部を賜つたもの度々神域を擴張して只今外苑には大運動場が設けられてゐる宮前、菖蒲園の五彩の菖蒲は清麗だそうだ。

邦「奈良電、休んだら駄目ぢやないか、これから花の吉野へ行くんだらう」

奈「いや、僕の軌道はこゝで終わつてゐるんだ、で、吉野へは、君獨りで行つてくれよ」

邦「オーイ、そりや困つたな」

奈「そのかわり、俺れの兄弟分の吉野鐵道の便をかつて直ぐ行くことになつてゐるんだから大丈夫だ」

邦「そうか、それぢやついでだから僕獨りで行かう、ところで、どうだ別杯を交わさう」

奈「よからう」

兩人カップを挙げる

邦「君の飲んでゐるのはそら何といふ酒だ」

奈「酒ぢやなあよ、電車は酒なんか飲まないよ、油さ、車輪へ注してゐるんだ」

邦「なるほど」

奈「では、邦坊君失敬」

邦「奈良電君失敬」

これから獨りだ。岡寺、壺阪、吉野口、六曲、上市等を経て終點吉野、一目千本、中の千本、奥の千本の吉野山、南朝四十年、涙ぐま

しき哀史に色どる「歌書よりも軍書にかなし吉野山」が只今眼前にある。感慨なかるべからず即ち一句なかるべからず。無い、よつてペコンと一つ頭を下げる。吉野山に白玉の露多かれ。以上。